

東日本大震災4年半

見守る



海中捜索を見守る宮城県女川町の高松康雄さん(58)。妻祐子さん=不明当時(47)=が津波にのまれた。「諦めるわけにはいかない」。潜水士の資格を取り、自らも海に入る
=6月上旬、女川町の女川港

思い 背負い 今も

東日本大震災から4年半が過ぎた。今も2500人以上の行方が分からない。「家族の願いに応えたい」。警察や海上保安庁、ボランティアなどは各地で捜索活動を続ける。
巨大津波の爪痕は深い。水没した石巻市長面地区は7月に本格的な捜索が始まったばかり。いまだ手付かずの場所も少なくない。
懸命の作業を、家族が見守る。「何か一つでも手掛かりが見つかってほしい」。月日がたっても、思いは変わらない。
(写真部震災取材班)

—— 続く捜索活動

悼む



犠牲者の家族から託された花を海に手向ける宮城海上保安部の潜水士。津波に奪われた多くの命を悼んだ
=6月上旬、宮城県女川町の女川港



誓う

大久保真希さん=不明当時(27)=は宮城県山元町でアルバイト中、津波に襲われた。両親の三夫さん(62)と恵子さん(57)は慰霊塔に「早く帰っておいで」と語り掛ける。「家族3人、どこに行くのも一緒だった」という仲良し親子。夫婦は「必ず見つけるから」と娘に誓う
=8月下旬、山元町

丹念に砂浜を掘り返す警察官。炎天下の重装備。滴る汗もいとわず、黙々と手を動かし続けた
=7月中旬、宮城県南三陸町

掘り起こす



重機も投入された石巻市長面地区の捜索。掘り起こされた土の中から衣類、かばんなどが次々に見つかっている=8月12日

滴る



届ける

月命日に合わせた気仙沼署とボランティアなどの合同集中捜索。親子で参加した神奈川県の二宮知子さん(47)と望胡さん(18)は「早く家族の元に戻してあげたい」と汗を拭った
=8月11日、気仙沼市

